「第25回医学情報サービス研究大会」報告

小野寺夏生 *

実行委員長（筑波大学図書館情報メディア研究科）

I. はじめに

25回目を迎えた今年の医学情報サービス研究大会（MIS）は、2008年7月12－13の両日、筑波大学の春日キャンパスを会場として開催された。筑波でも茨城県でも初めての開催である。今大会は、筑波大学図書館情報メディア研究科との共催で行った。

参加者は、事前登録、当日登録を合わせて278名（企業展示関係者36名を含む）で、第21回（東京）、第23回（千葉）に次ぎ大会史上3番目となった。以下、参加者統計から主要な数字をピックアップしてみよう。

地域の内訳では、関東地区が8割近くを占めたが、それ以外の地域からも、北海道から九州まで60名の参加があった。男女比はほぼ4：6で、かつてに比べると男性の割合がやや上昇している。参加者の所属別分布はこれまでと大きな差はないが、研究所図書館勤務、教職、学生は、絶対数は少ないもののそれぞれ過去最高であった。今大会の一つの特徴と言えよう。MISは継続的参加者が多いと言われるが、初参加者も103名（38%）を数えた。第10回以降の16大会の参加回数を見ると、今回が2回目と3回目の人がそれぞれ10%強、4回目以上が40%強である。10回目以上という常連に近い人が28名（10%）、16回皆勤という人も5名おられる。

なお、今大会の諸記録については大会ホームページ <http://mis.umin.jp/25/> を参照されたい。

II. 企画と準備

第25回大会を筑波でどうかという幹事会メンバーからの打診が、2006年の終わり頃筆者に伝えられた。筑波大の2、3人の教員と相談し、確かに一度筑波でやることは望ましいと考え、非力ながらお引き受けすることとした。

まずは会場の選定であるが、筑波大学との共催行事と

すれば会場使用料や光熱費が免除されることが判り、幹事会のご了解を得て、春日キャンパスの講堂その他を借用することとした。次に実行委員会の編成にかかり、2007年7月までに18名の委員が決まった（後に1人加わって19名）。

なお、今回が25回という節目の大会になることから、何か記念になるものに使うようにという趣旨の予算を幹事会からいただいた。実行委員会で種々検討の結果、トートバッグを参加者全員に配布することとした（グッズの項を参照）。

1. 実行委員会

19名の実行委員の所属別分布は、医学図書館4名、薬学図書館2名、病院図書館2名、企業1名、教職6名、研究所図書館2名、ほか2名である。教職6名はすべて筑波大図書館情報メディア研究科に所属し、それ以外の13名中6名が、同研究科の現役社会人大学院生であった。

2007年7月14日に第1回実行委員会を開き、以下の各班に分かれて企画・準備を進めることとして、各委員の分担を定めた：（1）プログラム、（2）企業、（3）抄録集、（4）参加者、（5）ホームページ、（6）会場、（7）グッズ・ロゴ、（8）懇親会、（9）会計、（10）事務局。それ以降、9月、11月、2008年1月、3月、5月、6月と、大会までの開催は7回に及んだ。委員の勤務先が東京と筑波に二分されているので、委員会もその両地でほぼ半分ずつ行った。

重要な事項は委員会で決定するとはいえ、委員会への出席と議論は、実行委員の活動のほんの一部に過ぎない。個別の活動や各班での打ち合わせの結果は、複数作られたメーリングリストにより伝達され、これらが主要な報告、連絡、相談、議論、調整の場となった。実行委員全員が共有するメーリングリスト Mis25-j に送信されたメール数は、大会終了直後に1,000通に達した（2008年11月末時点で1,100弱）。

*Natsuo ONODERA：〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2.

onodera@slis.tsukuba.ac.jp

（2008年10月9日 受理）

2. 大会ロゴ

ロゴに関する意見およびデザイン案を実行委員へのアンケートにより収集し、11月17日の実行委員会で決定した。大会ロゴはシンプルに文字と筑波山とし、キャラクターとして「ロケットおたま」を添えることとなった（前ページのカット参照）。当初、筑波ということで、四六のガマという意見が多く出されたが、最終的にはエキスポセンターのロケットとおたまじゃくしをイメージしたものとなった。

3. 会場

主会場は講堂とし、受付とポスター展示は講堂ホワイエでおこなった。その他は参加者が円滑に移動できるように主会場に近接した講義棟（7A棟）に配置した。企業展示には110人教室2室、グッズ・クローク・弁当引き換えおよび書籍頒布をまとめて80人教室1室、休憩所に80人教室1室を充てた。また、昼食時のみ110人教室と80人教室各1室を食堂として開放した。参加者企画には45人教室を充てたが、参加多数でこの点のみ規模算定を誤った。

企業展示では筑波大学のキャンパスLANを経由した有線・無線のインターネット接続を出展各社に提供した。会場で使用した机、ポスター掲示用パネル、案内板、プロジェクタやPC等の機材は全て大学から無償で借用した。

4. ホームページとメールマガジン

2007年11月にホームページを開設した。大会ロゴのおたまのキュートなキャラクターとロケットの未来的なイメージを中心に、共に学び、交流しあう楽しみを表現する目的で、パステルカラーを使用した共通ナビゲーションとした。ホームページは、プログラムをはじめとする各種催しもののお知らせはもちろん、研究発表等の

申し込み、参加登録にも活用した。これらの詳細はそれぞれの項に譲る。

また、大会への関心、モチベーションを高めてもらうためにメールマガジンを発行した。大会参加に関わらず購読できるようにし、ホームページでも公開した。大会の案内、つくばの観光・宿泊・お土産情報などを紹介する内容で、大会前に7回、大会後3回発行した。このメールマガジンの購読者は、最終的に226名に達した。

5. 発表・講演等の企画と演題募集

研究発表は口演とポスターの2方式とし、2008年2月の第1報発送と同時に演題募集を開始した。申し込みはすべて本会ホームページ上で行ってもらうこととし、締切を3月15日とした。発表者には口演とポスターのどちらを希望するか、演題申し込み時に選択してもらったが、全体の構成上、1件だけポスターから口演への移動を依頼した。

医学情報に関するサービス・製品の提供機関からの演題申し込みに対し、宣伝と受けとられることがないよう内容の確認をお願いした。これは、ここ数年、参加者アンケートなどで宣伝と研究発表の区分が曖昧ではないかという意見があり、幹事会でも議題に上がったことを踏まえたものである。

開催校の特徴を活かし、研究者の視点からみた図書館情報学の世界を参加者に伝えたいと考え、基調講演と継続教育はいずれも筑波大学の教員にお願いした。継続教育は別途参加費を徴収することが多いが、筑波大学との共催であることを考慮し、今回は無料とした。

参加者が独自にテーマを設定し、興味を持った人を募る参加者企画については、1題の応募があった。その他、オプションとして、医学図書館および図書館情報学図書館の2つの図書館見学ツアーを企画した。

6. 抄録集

ゴールデンウィーク明け早々に、発表者に執筆要領を添付して原稿執筆を依頼した。執筆要領は本会ホームページ上でも公開した。原稿提出締切は6月中旬とした。

執筆要領については、ここ数年で徐々に固まってきた形式をほぼ踏襲したが、原稿をMicrosoft Word形式とともにPDF形式で提出してもらうという仕様を追加した。しかし、原稿をPDF化する技術がそれほど普及していなかったために、結果的に混乱を招いてしまった感がある。

原稿依頼と同時ににお渡しした執筆要領はあってなきが

ごととして、見事にバラエティに富んだ体裁の原稿が提出された。今回は提出していただいた原稿をそのまま掲載するという前提で印刷スケジュールを組んでいたため、提出後の原稿に手を入れることは極力控えた。結果としてレイアウトが揃わず、不快に思われた方もいらしたかもしれない。

抄録集の内容は、プログラム、会場図、各種講演・発表の抄録、大会関連データという形で、例年に比べてシンプルなものにした。グルメマップや実行委員会からのお知らせ等は、持ち歩く際の便利さを考え、抄録集に含めないこととした。

7. 企業展示と書籍販売

過去に出展した企業を中心に、27社に参加条件を示して出展の要請を行い、5月中旬までに18社の申し込みを得ることができた。このうち11社にはプロダクトレビューも行ってもらったことになった。

企業展示で最も気になるのは、一般参加者の入りである。発表や講演が行われる主会場と企業展示会場とが別棟であるため、人の流れを作る工夫としてシールラリーを考えた。参加者は予め配布されたシールシートを持って各社の展示ブースを回り、展示企業からシールを貼ってもらう。そしてシールを集めた数に応じてくじを引くことができる。景品は、特賞で図書カード、参加賞は筑波ならではのものとして、(独)農業・食品産業技術総合研究機構が開発したサツマイモを基に作られたドリンクとした。

書籍販売は、学協会等の非営利団体または著者自身が特別価格で販売する場合に限り認めることとした。

8. 参加者の募集と登録

郵送による広報は、例年通り、過去大会の参加者で一定の基準を満たした者（参加回数や地域）と、主要な医学系図書館団体に加盟する図書館宛の、合計980通を送付した。第1報は開催告知と演題募集のお知らせをはがき1枚にまとめ、2月12日に発送した。第2報はプログラム告知と参加者募集などの各種書類を封書に詰めて、4月26日に発送した。印刷・発送作業は、当日に参加可能な委員が集まり作業した。同時に、本会ホームページ上にその内容を公開した。この他、諸団体のメールマガジン（6）、図書館関係雑誌（8）、医学系図書館ホームページ（9）、メール／メーリングリスト（10）にお知らせを出してもらった。大会当日のアンケートでは、直接の通知及び医学系図書館に特化したホームページやメーリ

ングリストにより開催を知ったとの回答が多かった。

参加受付は第2報発送と同時に開始し、本会ホームページよりフォームを利用して登録してもらうことを原則とした。参加登録のためのシステムには、(a) 登録者への自動返信、(b) 実行委員への登録者リストの自動配信、(c) タブ区切り形式での登録データ保存、の機能を持たせた。登録内容の変更は、登録者から実行委員への通知により、実行委員が直接データを書き換えることで対応した。また、名札（参加証）作成のためのスクリプトを準備したほか、集合写真発送用の宛名ラベルづくりにもこの登録データを活用した。

参加費は、一般参加（参加費3,500円）、大会1か月前までの参加登録者を対象とした早割り参加（参加費3,000円）、学生参加（1,000円：有職者は対象外）の3種類を設定した。参加登録の際、オプションとして懇親会参加と昼食の弁当申し込みができるようにした。参加費等は、参加登録の後にゆうちょ銀行の大会口座に振り込んでもらった。事前の登録は6月30日をもって締め切り、以降は当日受付とした。34名の当日参加者と多くの懇親会追加参加をいただいた。

9. グッズ

グッズは実行委員の意見をもとに決定し、定番のTシャツ（女性用もあり）、クリアホルダーに加え、ミニハンカチ、どこでもマグネットの4種類を用意した。素材の異なるグッズごとにロゴマークの色や大きさを調整し、電子メールで制作者との繰り返し校正を行った。赤字にならないよう、制作原価、販売価格などを考慮しつつ、売れ残りの出ない注文数を見積もるのは非常に難しかった点である。第25回を記念して参加者全員に配付したトートバックは、男女問わず長く使ってもらえるよう黒のキャンバス生地とし、グッズ班で制作を担当した。

10. 懇親会

まず懇親会場の決定であるが、春日キャンパスの食堂には100人程度しか収容できず、歩いても行ける距離で200人近くを収容できるのは2つのホテルしかない。近い方のホテルとは料金面で折り合いが付かず、もう一つのホテルと交渉した結果、例年並みの懇親会費で引き受けてもらえることになった。

料理については実行委員から「女性が多いのでデザートを多くした方がよい」という意見があり、ホテル側に要望を伝えた。アルコールは飲み放題としたが、焼酎と

ワインは含まれていなかった。鏡割りをしたいという提案があったので、日本酒は別会計で樽酒を注文して飲み放題からはずし、代わりに焼酎を飲み放題に入れてもらった。また、ワインも別会計で出してもらうことにした。

イベントを何にするかは最後まで決まらなかった。全員が参加できるものがよいという意見もあったが、200人近い人数だということ、話が盛り上がっている人たちはイベントに参加しないで話を続けてもらいたいということから、壇上でゲームを行うことにした。ゲームは「黒ひげ危機一髪」とした。

Ⅲ. 大会当日の点描

大会前日の7月11日には実行委員のほとんどが集まり、主に配布物の整理と会場の設営を行った。名札、弁当引換券、領収書、シールラリー用シートをまとめてネームプレートに挿入した。抄録集、参加者名簿、出展企業のパンフレット類、その他の資料は、記念品のトートバッグにまとめて入れた。このうち企業パンフレットについては、各社1種類に限定して事前に送ってもらい、それらをまとめて封筒詰めにした（この作業は数日前に行った）。会場設営では、各教室の机、椅子の搬出が大仕事であったが、大勢の実行委員がいたため予想より短時間で終わった。

以下、大会2日間の動きを催しもの別に報告する。

1. 受付、会場運営、会場案内

大会受付は、主会場となる講堂のホワイエに設置した。参加者受付、配布資料のお渡し、追加オーダー受付、参加者の各種申し出への対応、グッズ販売などの要求に対応できるよう、受付には常に実行委員が詰めている状態にした。参加者から配布希望があった資料や、演者からのプレゼンテーション資料については、講堂入口に設けた「配布資料置き場」に置いてもらい、参加者に自由に持って行ってもらう方式をとった。

会場案内のサインは、会場と所在地が最低限把握できる程度に示し、弁当配布場所や懇親会会場への誘導案内を必要時に設置した。

参加者用の休憩室は、机にテーブルクロスを掛けるなどして居心地の良いスペースを心がけ、暑い時期であることを考え、常時飲み物とお菓子を補充してこまめに片付けを行った。昼食時には、休憩室の他に2つの教室を開放した。

2日目昼休みに、恒例の記念撮影を講堂前広場で行っ

た。その日に注文を受け付け（キャビネ判、郵送料込みで600円）、後日郵送した。

2. 継続教育講演

継続教育講演では2つのコースを設定した。コース1では石井啓豊教授が『知識情報学の可能性と図書館情報学教育の展望』と題した講演を行った。筑波大学では1年前に学群再編が行われ、図書館情報専門学群から情報学群知識情報・図書館学類へと組織が変更された。講演では、図書館情報学がより広い視野を持った知識情報学へと転換するプロセスとしてこれを位置づけ、知識情報学とはどのような学問であるかについて話が展開された。コース2では松林麻実子講師が『ライフサイエンス領域の研究者におけるメディア利用実態と意識』と題した講演を行った。大会参加者の多くがサービス対象としているライフサイエンス分野の研究者の行動様式を明らかにし、図書館がどのような役割を担うことが可能かについて考察した。どちらのコースも第1日目の午前中に開催されたにも関わらず、多くの参加者が集まり盛況であった。

3. 基調講演

1日目午後の開会式に続いて、『大学図書館の未来』と題して植松貞夫教授（筑波大学附属図書館長）による基調講演があった。はじめに、大学図書館の教育と研究支援に関わるサービスについて、教育者の立場から説明された。特に、先端をゆく世界の図書館の資料・環境・設備について多くの写真を用いて例示された。身近な図書館との格差、到達目標の遠さを実感しながらも、図書館の支援機能の充実は図書館員による適切な利用者支援が必要であるという指摘から、日々の活動の重要性を再認識させられた。最後のマネジメントの視点からのお話からは、図書館の経営を担う館長としてご苦勞の多さが窺い知れた。

4. 一般口演とポスターセッション

一般口演は16演題で、「医史学」、「病院図書館」、「医療情報」、「大学図書館」、「データベース、シソーラス」の5つのセッションに分けて、2日間にわたって行った。館種、所属を超えて集う本大会らしく、多様なラインアップとなった。口演時間12分、質疑応答3分と、やや短めであったが、発表者、参加者ともに要所を押さえた様子が窺え、機械的なトラブルもなく、各セッションとも滞りなく進めることが出来た。

ポスター発表は講堂ホワイエにて10題が行われた。大学から展示用パネルを借用し、それぞれの演者には180 cm × 180 cm 相当の掲示場所を確保した。今大会では発表者による舞台上でのプレゼンテーションは行わず、1日目に1時間、2日目に30分、合計90分間の発表者の待機時間を設定した。この時間や休み時間などに、発表者と参加者との質疑応答が活発に行われた。

5. 参加者企画

1題の応募があり、大会2日目の昼休みに『医学系レファレンスの集い』として開催された。『医学図書館』の連載記事「レファレンス事例集」の紹介、日本薬学図書館協会の取り組み、国立国会図書館の「レファレンス協同データベース」の概要及びその有効活用法と豊富な内容であった。

大変な盛況で、参加者が会場のスペースが収まりきらず、皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫びする。また参加者企画と医学図書館見学の時間が重なり、双方ともに興味を持っていた参加者には残念な思いをさせてしまった。

6. プロダクトレビューと企業展示

プロダクトレビューでの1社に割り当てられた発表時間は僅か5分なので、展示ブースに足を運んでもらえるようなプレゼンテーションをお願いした。各社とも実行委員会側の趣旨を汲み取ってくれ、混乱もなくスムーズに消化することができた。

参加者が企業展示に足を運んでもらえる時間は、主に1日目のプロダクトレビュー後と、2日目の昼休みである。展示会場は主会場と離れている上に2つに分かれ、条件はあまりよくない。集客を狙って導入したシールラリーが参加者に受けなかったら、展示会場は閑散という

ことになりかねないという不安があった。しかし、幸いにも多くの人が足を運んでくださり、各社のブースでシールシートを片手に熱心に情報を収集されている姿を見ることができた。抽選会場では特賞がなかなか出ずヤキモキしたが、2日目に見事に引き当ててくれた方があり、一安心であった。

7. グッズと書籍の販売

予め準備していた「グッズ写真入の値札」を販売所付近に貼り付け、会計担当者からお釣りの小銭を預ってスタンバイし、大会受付時刻に販売を開始した。販売テーブルの上には見本品を置かず、注文をいただいた商品を背面のケースから取り出す方式とした。そのため、テーブルには販売グッズが一目で判るよう「価格一覧表(食堂のメニュー形式)」を用意した。若干残があったが、在庫管理や会計処理の煩雑さを考慮して通信販売などはせず、次回実行委員会へ見本品として引継ぐことにした。

グッズ販売と同じ会場で、3つの団体と2名の個人参加者がそれぞれの出版または執筆した書籍を特別価格で販売した。

8. 懇親会

初日の研究大会が終了してから送迎バスで懇親会場へ移動した。人数が多いので、2台の送迎バスで2回ないし3回のピストン輸送となった。受付にはグッズ販売のコーナーも設け、大会会場で購入できなかった人の便宜を図って好評を博した。

懇親会を始めるにあたり、挨拶に続いて鏡割りを行った。樽酒の中は筑波に因んで「霧筑波」とした。デザートを多めに用意したはずだったがあっという間に少なくなったので、追加注文をした。イベント「黒ひげ危機一髪」へは研究大会初参加者に出てもらい、簡単な自己紹介をしてもらった。ただ、残念なことに歓談の声にかき消されてほとんど聞こえなかった。

9. 図書館見学

2日目の昼休みに医学図書館、大会終了後に図書館情報学図書館と2つの図書館見学ツアーを開催した。両図書館ともに参加希望者が非常に多く、医学図書館については、厳正な抽選の下、参加者をあらかじめ制限させていただいた。抽選に漏れた方にはお詫び申し上げる。ツアーでは、それぞれの図書館スタッフの方に図書館の概要やコレクションについて説明していただいた。図書館情報学図書館では世界でも最も古い印刷物のひとつで

ある百万塔陀羅尼の実物を間近で見せていただき、参加者一同大いに盛り上がった。

Ⅳ. おわりに

このように、第25回大会は全行事を滞りなく終了することができた。2日間とも猛暑に見舞われたが、会場の熱気はそれを上回り、よい大会にすることができたのではないかと考えている。これも、講演者、発表者、企業展示の関係者、そしてすべての参加者の絶大なご協力によるものと、厚く感謝申し上げる次第である。

反省することも多々あるが、前章までの各項にも述べられているので省略する。参加者からのアンケートの集計結果（回収61通）では、「楽しかった」「また来たい」というお褒めの言葉を多くいただき、有り難いことであった（アンケート結果の詳細を大会ホームページに掲載しているので参照されたい）。いくつかあったご注文の中に、新暦お盆に近い時期で出にくい人もいるという声があった。これには全く気が付かなかったが、開催日の決定にもいろいろ考慮すべきことを教えられた。

発表されるスライドを印刷物で配布またはWebで公開してほしいという要望がある。しかし、スライドはその場限りのもので、より広い範囲での公開は望まないと

いう発表者もおられるので、今後ともこの要望に全面的にお答えすることは難しい（今回、発表者の許可を得たものをホームページから公開しているが）。

今後の発表についての問では、「発表は考えていない」が44%と半数近くを占め、「今後発表したい」の21%のほぼ倍であった。発表を考えている人がそれだけいると見ることもできるが、研究大会の趣旨である“Learning from Each Other!”の精神を伝えきれなかったのでは、という懸念も残る。

共催機関の筑波大学には、会場や施設の使用についての便宜の他、基調講演と継続教育講演の講師引き受け、図書館見学のお世話等、様々な協力をいただいたことを感謝する。また、実行委員諸氏には、準備から当日の運営、後始末までひとかたならぬ尽力を得た。この記事も、実行委員に分担執筆してもらったものを実行委員長がまとめたものである。幹事会の皆様からは折に触れて心強い支援、助言をいただいた。この他大勢の方の支えがあったことにお礼申し上げる。

来年の第26回大会は東京の北里大学で開催される。今回参加された方が全員集い、そして新しい方々が多数加わって、一層の盛り上がりを示すことを期待したい。

第25回医学情報サービス研究大会プログラム

第1日 2008年7月12日(土)

継続教育

- 09:30-10:00 受付
- 10:00-11:00 コース1 知識情報学の可能性と図書館情報学教育の展望
講師: 石井啓豊先生(筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科)
- 11:00-12:00 コース2 ライフサイエンス領域の研究者におけるメディア利用実態と意識
講師: 松林麻実子先生(筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科)

大会

- 12:10-12:40 大会受付
- 12:40-13:00 開会式・ガイダンス
- 13:00-14:10 基調講演
大学図書館の未来
講師: 植松貞夫先生(筑波大学附属図書館長: 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科)
- 14:15-15:00 一般演題 I (医史学)
01. 昔の子供の教科書にみる衛生事情
菅修一(滋賀医科大学附属図書館)
 02. 日本における医学図書館の歴史-戦前の大学医学部・医科大学に附属する図書館を中心に-
堰向志穂(筑波大学大学院図書館情報メディア研究科)
(*現独立行政法人日本原子力研究開発機構 研究技術情報部情報メディア管理課)
 03. 各地でデジタル化された『解體新書』から広がる散歩
堀江幸司(東京女子医科大学中央写真室)
- 15:15-16:00 一般演題 II (病院図書館)
04. 病院図書館員による「代行検索」業務
中村雅子(大阪府立母子保健総合医療センター図書館)
 05. 小児病院図書室から教育機関へのアプローチ
塚田薫代(静岡県立こども病院図書室)
 06. 新病院のスタートに図書室担当者ができること:新しい図書室と情報コーナー~からだプラザ~OPEN
鈴木初枝(愛知県厚生農業協同組合連合会 豊田厚生病院図書室)
- 16:00-17:00 プロダクトレビュー (11社)
- 17:00-18:00 休憩, ポスターセッション見学, 企業展示
- 18:30-20:30 懇親会 (会場 ホテルグランド東雲)

第2日 2008年7月13日(日)

- 09:00-09:30 受付
- 09:30-10:15 一般演題 III (医療情報)
07. 医療機能情報提供制度を考える
中村洋一(茨城県立医療大学)
 08. 医療消費者に対する情報支援-1~医療機関情報の提供~
宮原柔太郎(筑波大学図書館情報専門学群)
岩澤まり子(筑波大学大学院図書館情報メディア研究科)
 09. 医療消費者に対する情報支援-2~子どもの救急受診に関わる判断を支援する~

- 寺澤徳亮 宮原柔太郎(筑波大学図書館情報専門学群)
岩澤まり子(筑波大学大学院図書館情報メディア研究科)
岩崎陽子(横浜市東部病院)
須磨崎亮(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

10:20-11:20 一般演題 IV (大学図書館)

10. シラバスに沿った Web 版パスファインダー作成の試み
藤波みつ子 山西直子(首都大学東京図書情報センター 荒川館)
真喜志まり(首都大学東京図書情報センター 荒川館)
(*現 東邦大学習志野メディアセンター)
11. 医学教科書における電子化の可能性
園原麻里 酒井由紀子(慶應義塾大学信濃町メディアセンター)
12. 京都府立医科大学における利用者教育の事例
山下ユミ(京都府立医科大学附属図書館)
13. 医学書配架に関する一案
永江学 熊谷憲夫 吉田勝美 伊東良知(聖マリアンナ医科大学医学情報センター)

11:25-11:40 写真撮影

11:40-14:00 昼食, ポスターセッション見学, 企業展示, 参加者企画, 医学図書館見学ツアー (オプション)

- 13:00-14:00 S01. 参加者企画:医学系レファレンスの集い
牛澤典子(東邦大学医学メディアセンター)

14:00-14:45 一般演題 V (データベース, シソーラス)

14. 日本の医学雑誌のデータベース収録状況
時実象一(愛知大学文学部図書館情報学専攻)
15. 日本語初級学習者の利用に配慮したデータベース検索システム
-「日本語でケアナビ」を例にして-
田中哲哉 上田和子 角南北斗 前田純子 嶋本圭子
(国際交流基金関西国際センター)
16. シソーラス用語の解析によるアスベスト研究の動向
青木仕(順天堂大学図書館)

14:50-15:00 閉会式

15:05-15:45 図書館情報学図書館見学ツアー (オプション)

ポスターセッション

- P01. 19世紀初期米国医学雑誌の展示
山崎茂明(愛知淑徳大学文学部図書館情報学科)
- P02. 開発途上国に学術情報を支援するイニシアチブとオープンアクセス
城山泰彦(順天堂大学図書館)
- P03. MeSH 解剖学用語の変遷
阿部信一(東京慈恵会医科大学学術情報センター)
- P04. 情報可視化モデルに基づくがん情報の品質評価
岡義朗 竹内法広(医療法人沖繩徳洲会 千葉徳洲会病院)
- P05. レセプトによる情報の非対称性の緩和可能性
遠山正朗(埼玉工業大学)
- P06. 医中誌 Web における国内医学雑誌のフルテキストリンクの分析
児玉潤(杏林大学医学図書館) 松田真美 黒沢俊典
(NPO 医学中央雑誌刊行会)

- P07. 医中誌 Web における『摂食障害』に関する検索手法の分析
戸田久美子（古河市役所） 永盛彩 佐藤佳奈子（日立総合病院） 富田美加（茨城県立医療大学）
- P08. 正式開設となった入院患児・患者のための「親と子のとしょかん」の紹介
中村雅子（大阪府立母子保健総合医療センター図書館）
- P09. 選書方針の構築と図書利用促進プランの開発に向けて
小林晴子（愛知医科大学医学情報センター（図書館））
- P10. 看護職をはじめとする医療従事者の生涯にわたる実践・学習に必要な文献等の複製に係る権利制限の要望について－要望書作成の経緯
松本直子（聖路加看護大学図書館）

■第25回医学情報サービス研究大会実行委員会

- 小野寺夏生（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科：実行委員長）
- 岩澤まり子（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科：事務局長*）
- 天野 晃（理化学研究所バイオリソースセンター情報解析技術室：参加者，事務局）
- 岩下 愛（国立国際医療センター図書館：グッズ・ロゴ*）
- 大谷 裕（東邦大学医学メディアセンター：プログラム*）
- 岡辺 明子（農林水産技術会議事務局筑波事務所研究情報課：参加者）
- 城山 絵美（元・倉敷成人病センター：会計）
- 城山 泰彦（順天堂大学図書館：事務局，会計*）
- 児玉 闊（杏林大学医学図書館：企業*，プログラム）
- 千葉木綿子（DIC 株式会社 R&D 本部長付研究支援担当：企業）
- 辻 慶太（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科：参

加者）

- 歳森 敦（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科：会場*）
- 林 賢紀（農林水産技術会議事務局筑波事務所研究情報課：参加者*）
- 眞喜志まり（東邦大学習志野メディアセンター：ホームページ*）
- 松林麻実子（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科：抄録集*，懇親会）
- 緑川 信之（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科：懇親会*，抄録集）
- 山崎 静香（慶應義塾大学医学部：グッズ・ロゴ，事務局）
- 山本富美子（アステラスビジネスサービス株式会社研究支援センター：プログラム）
- 渡辺真希子（横浜市立大学学術情報課医学情報センター：ホームページ）

（※印は主担当）

■医学情報サービス研究会幹事会

- 山崎 茂明（愛知淑徳大学文学部図書館情報学科：代表幹事）
- 青木 仕（順天堂大学図書館）
- 及川はるみ（聖路加国際病院医学図書館）
- 大谷 裕*（東邦大学医学メディアセンター）
- 城山 泰彦*（順天堂大学図書館）
- 児玉 闊*（杏林大学医学図書館）
- 奈良岡 功（自治医科大学附属病院臨床試験センター）
- 松坂 敦子*（埼玉医科大学国際医療センター）
- 黛 崇仁*（東京歯科大学図書館）
- 谷澤 滋生（東邦大学習志野メディアセンター）
- （*印は2008.7.11から）